
胡蝶之夢

真墮男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

胡蝶之夢

【Nコード】

N5048M

【作者名】

真墮男

【あらすじ】

夢、現実。その境目は一体どこにあるのか。というお話しな気がする。

(前書き)

休憩がてらに書いた物ですので、誤字脱字などの修正はしませんがご了承ください。

流し読んで頂いて結構です。

「…う」

静寂。

寢覚めたばかりの自分の唸り声がやけに響いた。

辺りは薄暗く、もうそろそろ妖怪の刻が始まるのが見て窺える。

昼寝のつもりが、随分眠ってしまったようだ。

「…藍」

従者の名を呼ぶ。

嫌にジメジメする。

寝汗も凄い。

寝巻きが体にへばり付きとても不愉快だ。

早くこの無形の拘束から逃げ出したかった。

「…藍？」

いつもなら一言呼べば、屋敷の何処にしようと現れるはずなのに。

もしかしたら家を離れているのだろうか。

気付けば生き物の気配がしない。

やはりいないのだろう。

いつ出たかは定かではないが、人里へ買出しに行ったのなら時間はかかるはず。

「もう一眠り…」

そう呟き再び横になる。

汗は変わらず気持ち悪かったが、眠ってしまえば分らない。
幸い睡魔も、欲望に沈める為に手を伸ばしてきている。

「まったく、こんな時に藍ったら」

——よくも

従者への不満というより、流れて口から出たものだ。
寝起きで機嫌が悪いこともあるが。

「……そういえば」

——よくも私を

何故こんなにも寝汗をかいているのか。
布団を被っていたが、別に暑かったわけではない。

「嫌な夢でも見たのかしら？」

——私を…

ただその記憶が無い。
悪夢というものを見た場合、内容は大体覚えているはずだ。

覚えてなくとも、嫌な夢を見たな、と言う感覚が残る。
それすらも無いと言う事は、やはり違うのか。

「それにしても五月蠅いわね。一体誰が――」

――よくも私を

■したな

「――っ!？」

悪寒が走る。
一体何が起きた？

いや、何も起こっていない。
ならば何に怯えた？
今何を恐れた？

わからない。

「っ! 誰!？」

布団から飛び出す。
今まででなかった生き物の気配が急に現れた。

襖の向こう。

対して距離も無い。

襖の横にいる。

「だ、誰？」

自分は何に怯えている？

何をそんなに恐がっているのか。

「：待って」

同じような光景、前にも見なかったか？

凍えそうなほど寒い部屋。

冬でも無いのに肌寒い日に、寝巻きは自分の汗で濡れているのだから。

突然呻き声のような音が聞こえる。

ビシヤ、と泥を落としたような音に混じって。

襖の向こうから聞こえる。

すると、突然大きな音が響いた。

襖の奥の何かが、襖を叩いたのだ。

続いてカリカリと言う音が聞こえる。

何度も何度も、飽き足らずにずっとずっと。

やがてピタリ、と音が止む。

再び静寂に包まれ、唸る音も落下音もしない。

ただ必死に酸素を貪る、自分の呼吸音しかない。

本能的に拒否する体に鞭を打ち、閉じた襖に手を伸ばす。
震える手が襖に届き、ゆっくり——扉開け ■■■

「がっ!？」

頭が割れる。

脳髓が破裂する。

頭蓋が壊れる。

一体何があった？

襖の向こうには何があるの！

「グギギッ」

神経が侵される。

頭を抱えて後ろに倒れこんだ。

その瞬間

「っ!？」

追い討ちをかけるように衝突音が響いた。

心臓が跳ね上がり、体中の血液が湧き立った。

…カリ。

ひ

[illegible]

「いや……もういやあ……」

次々と攻め立てるように続く恐怖。

普段の彼女ならばこうなることはない。

なのに彼女の体が、心が勝手に反応して恐れるのだ。

今はもう精神がやられかけ、気を抜けば発狂してもおかしくないくらいに追い詰められていた。

「ゆかり…さ、ま」

「え？」

聞こえた。

声が。

聞きなれた声が。

「ゆかり、さま」

「ら、藍？」

襖の向こうから、従者の声が聞こえる。

そのことが嬉しくて、震える体を突き動かして襖に手を掛ける。

「—————え」

おかしい。

藍がいない。

いやそれ以前に、ここは何処？

見慣れはている筈なのに、襖を開けた先には庭があるはずなのに。

あれは…なに？

「っ!？」

何かに足を掴まれた。

視線を下げると、自分の右足を掴む左手がある。

「ひ…」

左手だけしか、ない。

手首より先が無い。

その先が、溶けてる。

「ゆかりさまあ」

「い、いや」

何故今まで気付かなかったのか。

藍はいた。

ずっと、足元に。

ドロドロに溶け、顔だけしか原型をとどめていない藍が。

「いやあああああああああ！……！！！！！！！」

藍のであろう左手から逃れ、再び部屋の中に入る。

壁に背をもたれ、もう一度藍を見る。

今まで原型を留めていた顔すらも、肉が爛れ目玉が落ちかけていた。

「う、ぐげえ、ぐぼええええ！」

あまりの衝撃で機能を失っていた嗅覚が、今になって屋敷中に充満する腐敗臭が鼻を突き、藍の惨たらしい光景を見て胃の物が込み上げて来た。

涙や鼻水まで出てくる。

「ゆかり…さ」

ズル、と。

藍は体の半身を残して這いずって来る。

「や、やめて藍。こな、来ないで」

これは夢だ。
絶対夢だ。

ありえないこんな事。

「よ、よくも」

今までと違う事が眩かれる。
何か聞いたことあるような。

「私を――殺しましたね？」

「っ!？」

殺した？
自分が？

違う。

そんなことした覚えは無い。
断じて違う。

「違いますよ、紫さま」

「え？」

横からの声。
そんなはずはない。
藍はそこにいるのに。

「ちえ、橙」

横を向くと、そこにいたのは橙。
いつも通りの笑顔を向けてくる。

ただこの状況では、その笑顔は狂ったものにしか見えない。

「紫さまは藍さまを殺したんです。そして」

「ひっ」

橙の顔が崩れる。

いや、溶ける。

「私のことも」

手を伸ばしてくる橙から逃れる。

橙は掴もうとした目標がいなくなった事で前のめりに倒れた。

ここに居たら駄目だ。

そう思い、藍がいるところは別の扉から外に出る。

どうなっている？

一体何が起こっている？

幻想郷に何が起こった？

壊れてしまったのだろうか。

私の愛すべきこの世界が、壊れてしまったのか。

一体何故――

「紫」

「っ、幽々子」

間延びする声が聞こえ、迂闊にも逃げるのをやめてしまった。

幽々子は霊体。

肉体を持たないから溶ける事はないと勝手に判断してしまったのだ。

既にこの世界は壊れているのだと、その考えを一瞬でも忘れてしまった。

「よくも殺したわね」

少しでも抱いてしまった甘い考えは、友人の肉とともに崩れ落ちた。

「幽々子様！」

「……」

彼女の従者が現れる。

最早そんなことに反応など出来ない。

反応している余裕など無い。

キッ、と此方を睨んでくる妖夢。

「よくも、よくも幽々子様を！」

腰に差した刀を抜き、切りかかって来た。
しかし、その刃が届く事は無い。

妖夢の白くて細い腕は、見るも無残に溶けていた。
不思議そうに自分の腕を見た後、ボロ人形のように膝から崩れて泥になる。

「……………」

力なく崩れ落ちる。

もう限界だ。

もう耐えられない。

こんな物見せ付けられて、正気を保てと言うほうが無理だ。

私はなにもしてない。

何もしていないのに。

なんで皆私が殺したっていうのよ。

「紫い」

「畜生…」

「なんでこんな、ことを」

気付けば、見たことあるような無いような顔が、泥となって私を
囲って這い回っていた。

魔理沙もいた。

人里で見た半獣もいた。

山に住んでいる神も、妖怪もいた。

竹林にいる宇宙人も、館に住んでいる吸血鬼も、力を振う鬼も。
みんなみんな、溶けていた。

「「よくも、私を殺したな」」

みんなみんな、私を責めた。

「紫」

「……………霊夢」

もう驚かない。

どうせこの子も溶けるのだ。

そして皆に混じって、私を殺そうとするのだろう。

「教えてよ霊夢、なんで私を責めるの？なんで皆溶けてるの？私が、
一体何をしたのよ」

なら溶ける前に教えてほしい。

どうせ溶けるのなら、彼女もその理由も知っているはずだ。

「教えなさいよ、霊夢」

「……………」

どういうわけか霊夢はまだ溶け始めない。

代わりに口を開こうともしないが。

「覚えてる？あんたは夢を見ていたのよ」

あ、喋った。

「夢？」

「そう、夢。思い出せない？あんたがついさっきまで見ていた夢」
凍えそうなほど寒い部屋。

——突然呻き声のような音が聞こえる。

——続いてカリカリと言う音が聞こえる。何度も何度も、飽き足らずにずっとずっと。

——やがてピタリ、と音が止む。

——震える手が襖に届き、ゆっくり——扉開け ■■■

「……あ」

「扉の向こう側は、あんたにとって地獄だった。あんたはそれを見なくなかった。だからあんたは自分の夢を追いやった」

「追い、やる」

夢を追いやる。

そんなことができるのか。

いや、出来る。

私なら出来る。

出来てしまう。

簡単なことだ、線を引けばいいのだから。

「夢と現実の境界。あんたの夢に、あんたが見た夢は存在しない。なら代わりに何処へ行くか。あんたが一番理解できるでしょ？」

悪夢が嫌だった。

こんな光景見たくは無かった。
だから現実へと追いやった。

本来やってはいけないことなのに、私は一時の気分で実行してしまっただ。

夢と現実を、入れ替えてしまった。

「ぐあ!？」

鬼の手が首を締め上げてくる。

いつの間にか、彼女らが目の前まで迫っていた。もう、逃げられない。

「れ、れい、むゝた、だずげ——がぁ」

魔理沙の手が右腕を掴んで捻り上げる。

左足を吸血鬼が噛み付き、血を吸うどころか喰い千切ろうとしていた。

どうやら、引き千切ろうとしているらしい。

「罪に溺れなさい紫。そうすれば、救われるかもしれないわ」

「オ、オオ、オオ、オオ、オオ、オオ、オオ、オオ、オオ、オオ……！」

けたたましい声とともに、肉が千切れる音が部屋中に響く。
血飛沫が飛ぶ。

辺りを赤く染め上げたそれは、全てひとつの体から出たものだ。

鼻がへし曲がるほどの腐敗臭に鉄の匂いが混ざり、この世のものとは思えない臭いとなる。

「ぎ、がが」

悲鳴を上げようにも、鬼の力で首を絞められては適わない。
おそらく声帯も潰れているのだろう。

「…ごぶ……れ、れい——」

四肢を引き千切られながらも何とか生きていたが、鬼の万力に締められ続けた細い首は遂に耐え切れなくなり千切れた。

「ああああああ!!!!」

「っ!」

荒い息。

玉のような汗。

「生きてる?」

生きてた。

じゃああれは一体。

あと今の物凄く痛いのは何だ。

「ゆ、紫様」

「っ!」

夢と同じ声に、咄嗟に身構える。

だがそこにいたのは、涙目で頭を摩るいつもの藍の姿。

どこも崩れてはいないし、どこも溶けてなどいなかった。

「ら、藍?」

「はい?」

「う———藍!」

「うわあ!」

何も考えずに抱きついた。
どう思われようと関係ない。
ただその無事な姿に安堵した。

「藍」

「ど、どうしたのですか紫様？」

「なんでもないわ。だけど、もう少しだけこうしていさせて」

「…紫様」

こういう時、何も聞こうとしてくれないのが藍のいいところ。
正直今はそれが凄く嬉しかった。

今でも不思議に思うことがある。
あれは、本当に夢だったのだろうか。

もし夢の中の霊夢が言っていた事が本当に正しかったなら、一体

何が夢で、何が現実なのだろうか。

私は現実の中の幻想に住まう。

よってこの幻想も夢と解釈する事も出来るが、今はそうではない。私が見た夢が、現実になら影響を及ぼす、もしくは既に及ぼしているかもしれないということだ。

もしこれが可能だとするならば、今私はどちらにいるのだろうか。

私が現実と思っているこの世界は、もしかしたら私の夢なのだろうか。

もう既に、現実と夢が入れ替わっていたとしたら。私はこれから、どうなるのだろうか。

今はまだ、わからない。

——よくも、私を殺したな——

(後書き)

ご意見感想などありましたらお気軽にどうぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5048m/>

胡蝶之夢

2010年10月11日05時34分発行